

## スーザン・サザード著 『ナガサキ——核戦争後の人生』

永川とも子

二〇一五年八月に米国で出版された『ナガサキ 核戦争後の人生』は、被爆当時未成年であった五人の人物に焦点を当て、戦後七〇年に渡る彼らの「生」を丹念に追った大著である。著者のサザードは、日本へ留学中の一九七〇年代、長崎原爆資料館を訪れたことを一つの契機とし、後に被爆者への聞き取り調査を開始する。本書は、彼らの被爆後のライフ・ストーリーを主軸とし、第二次大戦関連の日米資料が織り込まれた壮大なドラマだ。二〇一六年には二つの大きな文学賞を受賞し、そのうちのひとつ、デイトン平和文学賞の受賞スピーチにおいて、サザードは以下の言葉を残している。

被爆者の苦しみは、今日においても、広島と長崎の空に立ち上った原子雲のイメージによってかき消されているし、原爆使用を巡る白熱した議論の中で、小さいものとなつてしまつていきます。

この言葉には、米国の様々な文脈のなかで「原爆」が語られる際の示唆に富む論点が隠されている。まず、広島・長崎への原爆投下、およびその余波と被害は「きこの雲」や「終末論」といった

イメージの下に記号化され、被爆者の苦しみへとまなざしが向けられてこなかったという点。もう一つは、ヒロシマ・ナガサキを巡る言語空間では、原爆使用の是非を巡る政治的論争が支配的であるという点だ。

しかし実際のところ、二〇一五年以前にも、被爆者を視点人物に据えた物語は存在する。それでもなお、「被爆者の生は米国で語られてこなかった」とサザードが述べる際、この言葉の意味を今しばらく考えてみる必要がある。この点に関し注目すべきは、『ナガサキ』発表直後の概ね肯定的な書評群と文学賞の選評であるが、興味深いことに、そこには一つのパターンが存在する。それは、ジョン・ハーシーによるノンフィクション『ヒロシマ』との比較がなされているという点だ。特に、「個人の生に焦点を当てていること」と、「被爆者の痛みを表象している」点が取り上げられ、二者の類似性は強調されている。なぜ、一九四五年発表の「古典」と二〇一五年発表のナガサキの物語が、実に七〇年の歳月を超えて比較されがちなのだろうか。それは裏を返せば、ハ

シーの「古典」以来、被爆者は語られてこなかったということなのか。さらには、広島原爆を語るときの言葉を借りることでもしか、ナガサキについて語ることはできないということなのか。この素朴な疑問を踏まえ本小論は、『ナガサキ』というテクストを手掛かりとし、長崎原爆が言語化・物語化される際に批評空間が抱えてきた問題と限界について考えると同時に、長崎の被爆者の「生」を現代において語り直すことの可能性に迫ってみたい。

「核戦争によつて世界の終わりが来る」という終末史観が漂う作品は、冷戦期の始まりから流通し、その数は膨大である。確かに、欧米圏において原爆が取沙汰される際、こうした語りが「目立つ」ことは否定できないが、それらが「米国の支配的な語り」として類型化される際、ある危険を伴う。「類型化」とは、ある特定の語りの形が除外されてしまうというプロセスを含んでいるからだ。今回調べてみて発覚したことが、長崎原爆について書かれた欧米圏の小説やノンフィクションは確かに存在する。現段階で筆者が把握しているだけでも、以下の様な作品が確認されるので、実際はさらに多くの「ナガサキ文学」なるものが存在すると予測する。フランク・チンノック『ナガサキ——忘れられた原爆』（一九六九）、ピーター・タウンゼント『ナガサキの郵便配達』（一九八四）、エレノア・コア『ミエコと五つ目の宝物』（一九九三）、ジョージ・ウェラー『ナガサキ昭和二〇年夏』（二〇〇六）、クレイグ・コリー『ナガサキ』（二〇一〇）、カレン・ステルソン『サチコ』、ジョイ・コガワ『長崎への道』（二〇一六）、ロアルド・ホフマン『やっせい』（二〇一八）。

問題の所在は、これらが「欧米圏の原爆の語り」という類型から零れ落ちてきたという、ナガサキを巡る批評空間の閉鎖性という点

にある。この背景に関しては、ジョン・トリート（*グラウンド・ゼロ*）を書く『日本文学と原爆』（二〇一〇）、チャド・ディール（*Resurrecting Nagasaki: Reconstruction and the Formation of Atomic Narratives*, 2018）として柴田優呼（*Producing Hiroshima and Nagasaki: Literature, Film, and Transnational Politics*, 2018）の論に解答の鍵を求めたい。

トリートは「長崎からはマイノリティへの想像力に支えられた「犠牲の物語」が生み出されたとして、惑星を射程に据えた長崎原爆文学の可能性に光を当てているが、永井隆の言説に関しては「特殊な思想」——原爆という無差別に人間の生を剝奪する暴力について、キリスト教神学からの応答を試みた思想——によつて他の物語とはかけ離れた位置にあると指摘する。ディールは、日米の原爆言説空間における長崎の周縁化という問題設定をトリートと共有しつつ、永井の言説が焦点化されていくことになった背後に潜む力学を歴史的観点から考察している。それによると、永井による犠牲と救済の物語は、ナガサキを語る際の二つの流れを生み出した。第一点目に、永井言説が普及し、さらには過度に宣伝されていく過程で、他の被爆者によつて発せられた被爆の語りと言説史から淘汰されていったという点。そして、原爆を父なる神の意思であつたとする思想が、原爆投下を巡る米国の関与と責任を回避することにつながり、ひいては本人の意図を遥かに超えた核の物語——と一致をみたという点だ。柴田は、こうした永井言説の焦点化を巡る議論、そして長崎原爆について書かれた多くの語りが、欧米圏における核言説の類型に組み込まれてこなかったという議論が、ハーシーによる『ヒロシマ』の欧米圏での正

典化と問題領域を共にすることを指摘する。特に際立つた二者の類似点として、原爆を神の摂理とし、犠牲を美德とする論理が根底に据えられている点に着目した上で、これら二つのテクストが、欧米圏の核言説空間を取り巻く欲望を内面化した支配的語りのあり方であると考察する。

このように、欧米圏における原爆の語りがある類型に固定されることよって、被爆体験とは隔たりのある語りの場が形成されてきたとすれば、本書は閉ざされた言説空間の壁をどう乗り越え、どのような語りを展開しているのだろうか。

先ほど言及したように、『ナガサキ』は評者たちによって肯定的な反応を得たが、その根拠は「ハーシーのように、個人の生を描いた」という点にあった。しかし『ナガサキ』では、「個人の生を描く」という、一見人道的に思われる方法の下において実は隠蔽されがちな問題を描きこむことで、「古典」とは一線を画している。それは主に、登場人物の証言を借りた語り手による「告発」という形で表出する。例えば原爆投下直後を描いた第二章「爆発点」での被爆者の身体描写の影に潜む物語に目を向けてみたい。ここでは、被爆者たちは『ヒロシマ』の登場人物たちのような「見る主体」ではなく「見られる対象」という安全性がまったく保障されていない存在として描かれる。吉田勝二は「手足をもぎとられたり、頭が割れて脳みそが流れ出ている人たち」の行列に遭遇し愕然としながらも、友人から手渡された鏡の破片によって見た自らの顔も誰か分からないほどに膨れ上がり、焼け爛れていることを知る（七七）。無傷の傍観者としての立場から原子野を眺めていたかのように見えた谷口稜擘は、実は腕から火傷で破れた皮をたらしした他の多くの犠牲者たち

とまったく同じ姿であることが露呈する（八二）。彼らが見た原子野のパノラマは、彼ら自身を映し出す鏡でもあるのだ。ここで留意したいのが、サザードが本書の序章で述べているように、『ナガサキ』の想定読者は、「全知の視点」を採用するハーシーの『ヒロシマ』や公式声明を正典として受け入れてきた人々だという点だ。被爆者を「他者」として「眺めること」が、実は「見られること」と表裏一体だとするこうした場面は、全知の視点という安全な立ち位置から原子野を語ることが不可視化した人々の苦しみを焦点化することで、その欺瞞を暗に暴いている。『ナガサキ』で描かれる被爆者たちの傷ついた身体は、「一九四五年八月九日」を傍観者の立場から眺めることの意味を批判的に問い直すのみならず、二〇一五年の社会に対し、「一九四五年八月九日」を、終わりのない普遍的な問題として突き付けてもいる。

さらに、本書における被爆とキリスト教信仰を巡る描写についても考えてみたい。永井隆による原爆の物語が、キリスト教神学と結びつき、燔祭の論理によって被爆の語りを類型化した可能性については先述の通りであるが、『ナガサキ』でも、永井言説が市民の間で拡散し、再生産されていく様子が、被爆者たちの証言・日記・回想を通して描写されている。しかし語り手は、被爆者たちのある種の違和感——「長崎の人々が信じている神」への懐疑——を前景化させる。

五歳のとき原爆で父母と兄妹を失った辻本一二夫も、山里小学校四年生のときに作文を書いた。彼は自宅があった場所に建てられた掘つ立て小屋に六十歳の祖母と暮らしていたときの体験を綴った。（中略）祖母はいつもロザリオの数珠を

身につけ、たえずお祈りをしていた、と辻本は書いている。祖母は彼に「みんな、天主さまのおぼしめしタイ。よ力よ力」と言つてきかせた。

しかし辻本は祖母のような気持ちにはなれなかつた。原爆が落ちる前は祖母が食料品店を営むかたわら、父は井戸掘り職人をしていて、彼の家族にはお金もたくさんあつた。彼はそんな生活に戻りたくて仕方がなかつた。「もう一度、むかしにかえして……」と彼は作文のなかでお願いする。「お母さんがほしい、お父さんがほしい、兄さんも、ほしい、妹たちも、ほしい」(二二〇)

浦上の信徒であると思われる祖母の言動には、永井による燻祭の論理が影を落としてゐる。一方の少年は、自らの不幸な境遇が神の意思であるという思想を受け入れることができない。救済を懇願する少年の姿を通し暗示されるのは、永井が提唱した燻祭の論理への、ひいては、原爆と全能の神を接続させる核のレトリックに対する懷疑である。辻本の手記が挿入されているのは第五章「動かぬ時」であるが、本章は被爆後に一人取り残されて不遇の生活をしいられた市民を日常的に目撃したという人々の証言が描かれた場面でもある。こうした人々の一人であつたに違いない辻本の手記は、原爆の犠牲を神の意思だとする思想が市民の生活に根づいていた可能性を示唆する「記録」であると同時に、声なき市民の手記が『ナガサキ』というテクスト内で選定されることの影には、ユダヤ・キリスト教史観に支えられた語りによつて周縁化された長崎の位置を巡る、語り手自身の批判的な姿勢が見え隠れしている。犠牲をキリスト教的神の意思だとする論理に疑問を投げかけ、八月九日という理不尽な

出来事への応答を模索しながら支配的言説の影で苦悶する被爆者たちの姿が描かれることは、欧米圏における被爆者不在の核の語りの背後で影を潜め、類型化のプロセスから零れ落ちた語りの形に光を照らすことと、実は同一の構造の内にある。

著者サザードは、本書が「アメリカ人によつて書かれた物語」であることに触れ、以下の様に述べている。

私は、本書でとりあげた被爆者たちとは異なる文化や時代に生きてきたアメリカ人であることから、被爆者の体験を誤つた方向に操作、私物化するようなことは避けたかつた。(二二)また、本書は今年七月に日本語訳が刊行されたが、訳者の宇治川康江によると、被爆者の証言を極限まで再現しようとする著者の姿勢は徹底したものであつた。

訳出にあつて、サザード氏が私に強く望んだことがあつた。それは、彼女のインタビューに答える被爆者の言葉ができるかぎり忠実に引用してほしいということだつた。ときに長崎弁を交えながら語られる底知れぬ苦悩、悲しみ、怒り、後悔に満ちた彼らの実体験がリアリティをもつて読者に伝わることを願つてのことだつた。(四四七、四四八)

原子野を前に絶望し、犠牲への応答を模索して苦悶する人々の物語をアメリカにおける原爆の語りの場に組み込もうとする本書の試みは、「アメリカの原爆の語り」対「日本の原爆の語り」という二分法に修正を迫ると同時に、不条理な暴力が語られる際に周縁化されがちな語りをもつ力をも、私たちに向かつて投げかけている。

(宇治川康江訳 二〇一九年七月一日 みすず書房 四五八頁 三八〇〇円十税)